

蕾の悦虐（ロリマゾ）第6話

# いじめられっ娘二重唱 (前編)



濠門長恭

## 目次

|                    |      |
|--------------------|------|
| 登場人物 .....         | - 3  |
| 01. 七か月の山村留学 ..... | - 7  |
| 02. 性的イジメを目撃 ..... | - 32 |
| 03. レズで始まる友情       |      |
| 04. 香純ちゃんの騎士       |      |
| 05. 初体験は集団暴行       |      |
| 06. わいせつ罪で逮捕       |      |
| 07. お弁当は小便茶漬       |      |
| 08. 教員奉仕と雌犬芸       |      |
| 09. スク水で露出授業       |      |
| 10. 香純ちゃんの過去       |      |
| 後書き                |      |

## 登場人物

後藤薫子（●5）：クソ

イジメを告発して、かえってクラスメートから疎外されるようになり、山村留学を希望した。『縄と鞭の体育補習』の舞台となった七白学園へのAO進学が内定している。

本郷香純（●3）：カス

父は役場の金を横領したうえ、村の実力者のジャパユキ奴隷妻と駆け落ちした。母は、その弁済の為に熟女ソープでタコ部屋生活を強いられている。香純は、実力者の奴隷妻の代わりにさせられている。村人からも村八分にSEXを加えた村七分の扱いを受けている。

蒲田和夫

街で建設会社を経営している。地方政界へのコネを使って利益誘導することで、村の税収も住民の収入も成り立っている。村の中では、この男に逆らえる者はいない。

『淫乱処女のエロエロ・デビュー』で野原知子のバージンを奪っている。

蒲田峰人（●7）

街でワンルームを借りて進学校に通っている。  
週末には必ず帰って、香純を躰っている。

蒲田岳人（●4）

村の分校に通っている。家でも学校でも香純  
を虐めている。

野原勝利

野原智子の大伯父。死別した妻のボヤ騒ぎで、  
蒲田に首根っこを押さえられている。薫子の  
寄宿先。

森篤夫（体育と技術教諭）：モリトク

蒲田の口利きもあって、任期を延長して分校  
の裏ボスとして君臨している。独身。根っか  
らの両刀使いのサディスト。美少年を強制入  
部させ、『淫乱処女』のヒロインも紅一点と  
して甚振っていた相撲部は、第2分校との合併  
時に廃部。

豊田千草（養護教諭）：チグサ

やはり任期を延長している。レズのサディス  
チン。モリトクのパートナー。

奥村征司（美術と音楽の教諭）

単身赴任。転任したいが、ままならない。女

子生徒にヌードモデルをさせてもお咎めなしという環境を捨てがたくも思っている。『淫乱処女』では執拗にヒロインを虜めたが、香純は（他の教師と同様）たまに性処理人形として使うにとどまっている。

今里勇気雄（駐在さん）

僻村への赴任が決まって、フィアンセに逃げられた。弱みを握られて蒲田の言いなりになっているが、開き直って積極的に加担することもある。



## 01. 七か月の山村留学

この学校では、二学期がふつうより十日も早く始まる。春には田植え休校、秋には稲刈り休校があるので、そのしわ寄せ。

それに、AO入学に向けたカウンセリングとか適性テストとかが八月上旬まで続いたから、わたしの夏休みは二週間となかった計算になる。もっとも、六月からはフリースクールだったので宿題がなくて……すごくきつかった。落後してフリースクールとか思われたくないので、一学期の復習と二学期の最初までは予習してたから。

つまり。満を持しての山村留学。人生リセット。なんて気負いは、心の内にしまい込んで。いざ、出陣（←気負い過ぎ）。

始業式に先立って。わたしは分校長でもある教頭先生に連れられて講堂の舞台（演壇？）に立った。

ぐるっと、全校生徒を見回す。ていうか、たったの四十三人。三学年でふつうの一クラス分。わたしは四十四人目。縁起でもない。

だけど、ほんと。●学って子供からオトナへの急成長時期だよ。一年生はみんな幼いし、三年生は女子校生秒読み。二年生がばらついてる。まだまだ●学生って感じの子もいれば、三年生よりおとなびた子もいる。

わたし？ 二年生には四勝一敗だけど、同学年の子には、一勝六敗三引分かな。156cm / 50Kg ジャストは、まあ平均的だと思うけど。79 (B) / 62 / 83は……ガキ体型のまま大きくなった、とまでは思っていないけど。

あっと、ご挨拶しなくちゃ。

「初めまして。後藤<sup>かおるこ</sup>薫子といます。卒業までの七か月間だけですけど、みんなとお友達になれて最後の●学生生活をエンジョイしていきたいなと思っています」

まずは、無難にまとめる。だけでは、印象が薄いかなと思うので。

「わたしがこの学校のことを知ったのは、リアル萌え米でした。わたしも農作業を手伝って『おこめ・ガールズ』になりたかったのですが、今はやっていないそうなので、それが残念です」



ちょっとざわめいて。それっきり、なんだか微妙な空気。半分本気で半分受け狙いだっただけ——滑っちゃったかな。

でも、なんでだろ？ あれ、一部のマニアにはすっごい人気で、オークションで十倍以上の値段がついたそうだけど。あっ！ 『一部のマニア』てのが、問題なのかも。

「後藤さんは、まだこちらの暮らしに慣れていないので、皆さんでフォローしてあげてくださいね」

教頭先生が引き取ってくれて。わたしはペコンとおじぎして壇上から下りて、三年生のいちばん前の端っこにあるパイプ椅子に着席。

三年生は、わたしを含めて十八人。二年生が十五人で一年生が十一人。なんだか、先細りになってない？

生徒数が減ったので、二年前に隣の第二分校と統合して、この人数。いずれは、街にある本校に再統合されて、マイクロバスで通学することになるのかな。なんて、来たばかりの学校で何年か先の心配をしても、しょうがない。

それよりも。今度こそ、すこしくらいの不

合理には知らんぷりしてでも、無事に学校生活を終えなくちゃ。七白学園へのAO入学は、秀でた部活実績がないわたしには、山村留学が必須なんだから。

なので。後ろを振り返ったり横を盗み見したりせず、お行儀よく始業式を終えた。

古い木造の校舎は、ちゃんと耐震対策が施されてるっていうけど。大型台風直撃されたら、まとめて吹き飛ばされちゃいそうな印象。ちゃちいって意味じゃないよ。生徒が何百人もいた時代に建てられたので、十個以上の教室がある。ので、各学年の教室は隔たっていて、隣のクラスの騒ぎが聞こえてくるなんてことは、なさそう。だからなのかな。

「前はフリースクールに通ってたとそうだけど、なんで、こんなド田舎に来る気になったの？」

「後藤さんのお父さん（語呂合わせになってるので、質問した当人が笑っちゃって、五秒中断）——ごめん。後藤さんとは、シングルパパで出張が多いんだよね。それと関係あるの？」

個人情報、ダダ漏れ。三年前までブルマが生息してただけあって、ゼロ年代テイスト。

ええい、郷に入ってはローマに通ず（わかってるよ。深刻にならないための呪文なの）。プライバシー全廃。

元々の学校で、イジめられてた子をかばったら（先生の対応がいいかげんなので、音声と画像を警察に持ち込んだんだけど）、その子は転校しちゃって、次はわたしがシカトの対象にされて、居づらくなってフリースクールへ逃亡。進路を心配した父親がカウンセラーに相談して、本来は小中高短大一貫教育私学への高校からの入学が決まった。まだ内定だけど。

学力テストはフリースクールでの精進の賜物だったけど、深層面接とかA I カウンセリングとか、あれこれあって、最後がA O 『資格』の問題。順序が逆のような気もするけど、それだけ父親は焦ってたんだと思う。

最初から山村留学と決まってたわけじゃない。他の人にはないユニークな経験。でも学力は犠牲にしない。という条件の中で、国内留学の話も出てきて。

「受け入れてくれる学校は幾つもありますが、やはりユニークな所でないと評価しづらいですね」

学校全体で昔の織物の再現に取り組んでいるとか、シイタケ栽培で予算以上の備品をそろえているとか、いくつかの例を紹介された。その中でわたしが興味を持ったのが、リアル萌え米。女の子が稲作を手伝って『このお米はわたしが作りました』なんて、スク水とかブルマ体操着とかの画像をバーンと袋に印刷したやつ。

そういう新奇なことをする村ってのも面白いかなと思った。わたしの写真が袋になって全国展開されるってのも、ちょい憧れたぽいし。それが廃止されたってのは、後で知った。

「残念でしたね。でも、もう転校は決まっていますから」

カウンセラーは、ちっとも残念そうじゃなかった。元から知ってたような口ぶりだった。

「でも、古風なところと斬新なところが入り混じった、面白い学校のようなですね」

そういったことを、リアル萌え米は別にして、かなり突っ込んだとこまで打ち明けた。

「ふうん。人それぞれ、いろいろあるよね。でも、後藤さんは卒業したら村から出て行くんだから、あまりあれこれ詮索しないほうがいいと思うよ」

個人情報とっ散らかしといてそれかい——なんてツッコミは、もちろんしない。

「でも。仲良くしてね」

なんて社交辞令でかわしといた。

後で思えば——イジメを告発したってのが、向こうの警戒網に引っかかったんだろうと気づいた。

事実。ネットに上げれば大炎上って状況に遭遇して、わたしも巻き込まれてしまったんだから。

HRで席替えがあって。ほかの子はくじ引きだったけど、わたしはふたつの理由でいちばん後ろにされた。好奇の目で見られないための配慮と、わたしがみんなのすることを見習って、この学校での習慣を早く覚えるためだそう。

個人情報ダダ漏れの田舎らしい距離を置かない付き合いには、たしかに面食らったけど。

方言とかはほとんど耳にしないし、ネットで情報が氾濫してるから、見たことのない都会のあれこれを根掘り葉掘りされることもない。ちょっと気をつかわれ過ぎてると思う。

席替えのあとは、委員の選出。学級委員長と副委員長と図書委員と体育委員（後片づけ係）と広報委員（ポスター貼り）と庶務委員（雑用係）と整美委員（率先ゴミ拾い）と。一クラス十八人だから、半数くらいが役付になる。わたしはもちろん立候補しなかったし、見ず知らずのよそ者を推薦する物好きや意地悪もいない。

掃除当番と購買当番は平等に。この学校は給食がなくて、お弁当持参か購買でパンを買う。その売り手は、生徒の当番制になってる。

「御代官様、焼きそばパンをキープしといてくださいませ。お礼として、レアモンスターを差し上げます」

なんて裏取引が……ないよね。

午前最後の授業は、初日からいきなり体育。全学年の女子が一斉に、更衣室へゾロゾロ。といっても二十二人だけど。

「うわあ、焼けたね」

「なに、そのエロ水着の跡」

「エロくなんかないよ。ふつうに三角ビキニじゃん」

「今時はね、スク水のほうが、よっぽどエロいんだよ」

「うわ、Tバック。さーてーはー？」

「クミこそ、たくさんもまれましたっくらい、たわわになっちゃって」

下ネタ絡みでわいわいきゃあきゃあは、三年生の独壇場。一年生と二年生は、それぞれ部屋の隅に固まって、もそもそと着替えてる。

その中にひとりだけ、すっごく目立つ黒のハーフカップブラ&ローライズショーツを着けてる子がいた。さっき壇上から眺めてて、ランドセルが似合いそうに思った筆頭の子だった。髪もショートボブじゃなくて、いかにもな『おかっぱ』。なので、違和感と断定できるほどのギャップ。本人はおとなぶって得意なんじゃないかな。わざわざセーラー服を脱いでみんなに見せつけてから、体操服に着替えたんだから。もっとも、反応はなかった。ていうか、露骨に無視されてた感じ。

当てがはずれたのか、その子は、さっさと

着替えて更衣室から出てった。わたしは、ほかの三年生に合わせて、ショーパンははいたけど、まだスカートのまま。みんなが脱ぎ始めて、わたしも脱いで。またもや、驚いた。なんと、十人の三年生のうち、三人が太ももの付け根まで露わ。それって、ブルマ？ 生きてる化石というか、間近に見ると、女のわたしでもエロいって思っちゃう。まさか、お姉さんのお下がりじゃないよね。男子を挑発してるのかな。三人のうち二人は、三角ビキニとTバックの子だもの。

運動場に集合して、またびっくり。授業は男女合同。先生は男女ひとりずつだけど、男性のモリトク先生が全体を取り仕切って、女性のチグサ先生は助手の役割に徹している。

誰も、あらたまって『森先生』とか『豊田先生』とは呼んでない。授業でも先生をニックネームで呼ぶなんて、いかにもアットホームというか、アットイナカ。

で、授業は初っ端から(初っ端だからかな)持久走とかボール投げとか、体力測定ぽいことをやらされた。まだまだ暑い盛りにグラウンドを何周も走らされたら、汗びっしょり。



いいかげんに、手も足も抜きたくなる。けど、みんな真剣。各学年の男女別で下から三分の一まで（小数点は男子は切り上げ、女子は切り捨て）は、放課後に補習があるそうだ。時代錯誤のスパルタだよ。

そのせいで、とくに三年男子はぶっ倒れるんじゃないかって心配になったくらい。

女子は、まあまあ真剣だけど必死まではいかない。わたしは、むしろペースダウンして十一人中五位。あとで聞いたら、順繰りに補習当番を決めてるそうだ。てことは、わたしも補習を受ける日がくる。

必死と真剣の中で、ひとりだけ例外がいた。黒下着の子。体操服に着替えたけれど、見学にまわってる。ていうか、見てもいない。体育座りして雑草を摘んでなにか編んでたかと思えば、ごろんとあお向けになって、両手を突き上げてジャンケン占いみたいにして空をのぞいたり。

わ！ なにしてるの？　しゃがんで、ショーパンを下げて……水がほとぼしってる。野ション？

あたりを見回して、わたしは二重のショッ

クを受けた。かなりの子が気づいてる。女子は露骨に顔をしかめて、知らんぷり。そして男子（特に一年生）は、ガン見。でも、走るスピードは緩めない。ので、三人もつれて転んじやった。

「こらあ！ 脇見するな」

モリトク先生に叱られてる。

でも、モリトク先生もどういう人なんだろう。昭和熱血スポコン漫画でもあるまいに、いつも竹刀を持ち歩いてる。で、気楽に頭とか（さすがに、ほとんど形だけ）たたくし。

ううん。抗議なんかしない。波風立てずに、平穩に七か月を過ごすんだから。

授業が終わって。

女子は更衣室へ、男子は着替えに使う専用の教室へ一直線なんだけど、例外が二人。黒下着の子は、あっちへふらふら、こっちへふらふら。さっき作った雑草のリングを円盤か手裏剣みたいにぶん投げて、拾いに行かずに反対方向へスキップ。

わたしは、その子のことがすごく気になって、迷探偵カオルコ。

更衣室にはいったときは、五人くらいしか残ってなかった。

「ふふふーん♪」

尾行してるホシは、いきなりハミングを始めたと思ったら。なんか、身体をくねくねさせながら、体操服を脱いでって。

ええっ!?

本日最大の驚き。その子、下着を着けてなかった。ブラジャーとショーツに見えたのは、ボディペイント……でもない。日焼けの跡だ。わざわざ、身体のほかの部分隠して肌を焼いたんだらうか。なぜ、そんなことをするのか、さっぱりわからない。ゆいつ頭に浮かぶのは、エロ絡み。でも、こんな幼い印象の子が？　まさか、変態チックな彼氏がいるとか？

「ふふふーん♪」

まだ裸のまま、ダンスみたいに身体を揺らしてる。あれ？　太ももにガーターベルトみたいなアザが見えてる。二の腕にも、似たようなアザ。SMプレイの縄の跡もあんな感じだよ（それくらい、ネットで見てる）。ほんとに、そういう子——な、わけないよね。

逆日焼けもSMプレイも、さっきの天真乱漫ぶりからは想像できない。

「いいかげんに、してよ！」

三年生の、石山京香さんだっけ。バアンと壁をたたいた。

「そういうのは、あたいらのいないとこでやってよね」

ん？　なんか、問題発言。よりも。その子の反応に驚かされた。

「うああ、ごめんちゃい。カスちゃん、いいこするよう」

頭を抱えてしゃがみ込んで。まるで、ママに叱られた幼児みたいな反応。

「さっさと着替えて、教室へ戻りなさいよ」

石山さんに叱られて、ぴょんって立ち上がると、スカートをはいてセーラー服を頭からかぶって、ろくに形も整えずに、更衣室から逃げてった。

あ、体操服が脱ぎっぱなし。誰も、それを拾おうとしない。カスちゃんという子が最初から存在しなかったみたいに振る舞ってる。わたしが出しゃばる理由がないし。事情もさっぱりわからないので。とりあえずは、誰か

が事情を教えてくれるまで、様子見を決め込んだ。

その日は、午前中で授業は終わり。購買部もお休み。

一緒に帰ろうって声もかからなかったので、ひとりで校舎を出て。校門の横に停まってるマイクロバスは、遠くの村から来てる子達を待ってる。でも、全員じゃない。この村の生徒は自転車通学禁止だけど、遠距離の生徒は特別に許可されてる。だけど、すごい山道だよ。電チャリでも厳しいんじゃないかな。

下校は下り坂だから、登校時の三分の二くらいの時間で、野原さんの家まで戻れた。

野原さんというのは、独り暮らしのおじいちゃん。四年前に、従弟の孫娘さんかな、一年間の山村留学で面倒を見て、わたしくらいの年頃の女の子の扱いに慣れているとか。カウンセラーさんに紹介してもらっただけで、詳しいことは知らない。

野原知子さんだっけ。やっぱり七白学園に進学したっていうから、なかなか浅からぬ縁がある。

それはともかく。たしかに、このおじいち

ゃんは年頃の女の子の扱いが上手。学校のことを根掘り葉掘りもせず、わたしの希望に沿って家事分担を決めてくれた。料理なんかできないって宣言しても、オンナノコガソレジャイカンとかお小言もなしで、わたしは掃除全般と自分の分の洗濯に決まった。

「稲作はもうしんどいが、食い扶持と小遣い稼ぎくらいには畑を作っとる。気が向いたら手伝っておくれ」

そだよね。せっかくの山村留学だもの。農業体験は、ぜひしておかなくちゃ。

でも、その前に。学校には持ち込み禁止のスマホでメッセージをチェック。どこからもなにも来てなかった。

うちの父親は、ほんと娘の日常には無関心。わたしがシカトされたときは素早く動いてくれたけど、カウンセラーとかAO入学とか、お金で強引に解決したなって印象がある。

野原のおじいちゃんと同じで、年頃の娘を下手につつけばヘソを曲げるだけと、わかてるのかもしれないけど。それをうまくあやして掌の上で遊ばせてくれるのが、理想の父親像だと思うけどな。

待てよ。もしかして、新しいメルアドをちゃんと登録してるのかな。この村で使えるキャリアは一社だけ。なので機種変更したんだけど、気分一新（前の学校の子をシャットアウト）で電話番号もメルアドも変えたから。

念のために、メールを打つところ。

まあね。ごちゃごちゃ長いメールを書くのは面倒いし、ひん繁にメッセージをやり取りするのは、父親が嫌がる。わたしだって、うざい。年頃の娘は無干渉の放置が一番なんだよ。でも、SOSのときは、しっかり助けてほしい——なんて考えると、けっこう理想の父親像かな。

あとは適当に時間をつぶして。おじいちゃんの畑仕事の手伝いじゃなくて足を引っ張って。それから、晩ご飯。でも、冷凍ハンバーグと豚汁の組み合わせって……。

翌日からは平常営業。早朝の畑仕事は朝寝坊しちゃった。大急ぎでご飯を弁当箱に詰め込んで、ふりかけで三色そばろ（もどき）。残り物のハンバーグと小分けパックのサラダを添えて。いざ登校。

これが、アスファルト仕様のひ弱な都会の子には厳しい。山道に差しかかるなり、後ろからどんどん電チャリに抜かれてく。あれ、絶対に違法改造車だと思う。軽く脚を動かしてるだけで、ずんずん登ってくるもの。

まあ、電チャリはしょうがないとして。徒歩通学の子にも抜かれる。みんな、鍛えられてるなあ。

「おはよう、後藤さん」

「おはよう」

「お先に～」

これの繰り返し。

延々と山道を登って、中腹の高台にある学校へ、氣息えんえんでたどり着いた。

授業は、どうってことなかった。フリースクールでは意地になって先へ先へと進めてたから、このあたりは復習みたいなもので、余裕しゃくしゃく。あまり『できる子』に見られないよう、気をつかったくらい。

お昼休みになって。男子全員が教室から出てった。お弁当を持ってる子もいたから、教室の外で食べるんだ。そういえば、食事と休憩の時間が分けられてなかった。時代錯誤の



スパルタ教師もいるけど、こういうところはおおらかなんだ。と思ってるうちに、二年生の女子がまとめてやって来た。四人。てことは、カスちゃんと自称してた子以外の全員。男子と女子に分かれて食べるってのは、封建時代の男尊女卑の名残——なんて、根拠レスに思ってみたりするけど。一年生がいないんだから、違うよね。

彼女は購買かなって思ったけど、いつまで経っても姿を見せない。ま、体育のときの天真乱漫から考えて、どっか好きな所で食べるんだろうくらいにしか思わなかった。

それでも、いちおうは聞いてみる。

「カスちゃんて子、本名は本郷香純でしょ」

生徒全員たった四十三人の名前は、名簿で暗記してる。名札を見たら、この場にいる二年生は芝山（つぶら）、時末（詩織）、木田（真帆）、石山（カンナ）。いないのは本郷香純ちゃんということになる。

「なんだか変わった子みたいだけど、お昼はみんなと食べないの？」

「やめてよ」

ドスの利いた金切り声。そんな感じだった。

三年の石山京子さん。これまでの感じだと、二年の石山カンナちゃんとは姉妹というわけではなく、偶然の一致か親戚同士。たぶん、親戚だと思う。四十三人の中に同じ苗字がほかにも三組ある。

「カスのことは口にしないで。部外者は余計な詮索しないでちょうだい」

それから。わたしの心の中を読んだみたい

に。  
「言っとくけど、一年の本郷友恵も三年の本郷彩香も、あの子とはまったくの無関係だからね」

「……ごめんなさい」

謝りはしたけど。まったく釈然としない。それどころか、誰かがボソッとつぶやいた言葉が耳に残った。

「シチブなんて、けがらわしい」

けがらわしいって、それ、イジメでもそうは使わないひどい言葉だと思う。それと、シチブってなんだろう。まさか、シカトとハチブのリミックス？

なんでも、いい。わたしには関係ない。かばってあげた相手に恨まれるなんて、もう二

度と経験したくない。

と、固く心に誓ったつもりだったけど。

放課後。転入手続きの書類に不備があったとかで、教職員室へ呼び出された。

廊下を歩いているとき、校庭を三年の男子が五人ほど固まって歩いているのが目にはいった。その集団の中に香純ちゃんがいる、というよりは男子に取り囲まれてた。でも、イジメとかいった雰囲気とは違って、ほっとした。香純ちゃん、楽しそうにスキップなんかしてる。

書類の不備ってのは、わたし本人の署名が抜けてたってことで、それはすぐ訂正して終わり。

陸上部が男女合同で部活してるのを横目に見て、校門を出た。

生徒数が圧倒的に少ないから、部活も限られてくる。体育系は陸上とテニスだけ。文科系は手芸部と美術部と読書部。わたしは、三年生が引退するタイミングでの転入だから、どこにも所属しなくてOK。

ということで、まっすぐ帰宅（帰宿？）して、またおじいちゃんの畑仕事のお邪魔虫。ごめんなさい。

——なんて、のどかな山村生活は最初の一週間だけで終わってしまうなんて、そのときのわたしは、もちろん想像もしていなかった。

その三日目は掃除当番。一クラス十八人だから、当番はすぐ回ってくる。でも、教室はふつうに広い。ので、負担が大きい。

大垣内くんと真鍋くんと千葉さんとわたし。机を教室の奥に押し込んで、木張りの床をモップで拭いてるとき。窓の外に香純ちゃんの姿が見えた。二年と三年の男子に囲まれて、またスキップしている。

手はちゃんと動かしながら様子を見てたら、体育館兼講堂の横手にある小さなプレハブ倉庫の中には行ってった。

それからチラ見してたけど、掃除が終わるまで誰も出てこなかった。

何人もの男子が女の子ひとりを倉庫に連れ込んで——エロ漫画なら、お決まりのパターン。まさかね。とは思うけど、中でなにをしてるか、それ以外には思い浮かばない。まさか、ミステリー小説みたいに裏口から出てったとか？

係わらないほうがいいのだろうけど、不安と心配が九割。好奇心もちょっぴり。でも、確かめに行けなかった。

「後藤さん。今日は一緒に帰らない？」

千葉睦月さんに声をかけられた。香純ちゃんのことかなければ、尻尾パタパタってくらいにうれしいんだけど。

「う、うん。誰かと一緒なんて、こっち来て初めて。よろしくね」

石山さんの剣幕を思い出して、睦月さんに尋ねるのはやめておいた。

「わたし、足が遅いから、ゆっくり歩いてね」

「下り坂だもん、関係ないよ」

後ろ髪を引かれる思いで、こういうのだなと考えつつ、二人ならんで校門を出て。

「田舎って空気がおいしいとか、よくいうけど。うちとしては、テレビが百チャンネルもあるほうがいいな」

「でも、そんなにあれこれは見ないよ」

「三年前に、やっと光がつながって文明開化したと思ったのに、ケーブルテレビが見れないんじゃ、意味ないよ」

そうかな。わたしとしては、長いテレビ番

組よりは、数分で完結するヨツベとかが好き  
だけど。

「こっち来て、退屈じゃない？ ゲーセンも  
ないし、コンビニもないし、スーパーもない  
し、映画館もないし、テーマパークもないし」

わたし、クスッて笑っちゃった。都会の子  
って、そういったところで遊びまくってると思  
われてるのかな。

「だけど、水田と畑があるし、舗装されてな  
い土の道があるし、蓋をされてない小川があ  
るし、昼は鳥の鳴き声とか、夜は虫やカエルの  
鳴き声とか。街にはないものが、ここには  
たくさんあるよ」

「それじゃさ、ここに死ぬまで住める？」

うぐ。言いたいことはわかる。豪雪で悩ま  
されてる地方に観光客が行って、「雪国はロマ  
ンチックですね」なんてほざくのと、わたしの  
言ってることは同じなんだ。

「うーん。正直、無理。だけど、ぎゅう詰め  
の電車で通勤して、痴漢とかノルマとかパワ  
ハラとかホリハラとかでストレスためるより、  
重労働でも晴耕雨読の農業のほうが、人間的  
だと思う」

「農協とか役場とか、けっこう人間関係が陰湿……あ、そうだ。野原のおじいちゃんのことだけど、火の始末には気をつけてね。五年前だったかな、ボヤ騒ぎがあったんだ。それでね。来週の週末に、何人かで映画を観に行こうって話があるんだけど。後藤さんも交ざらない？ 映画のタイトルはね……」

ボヤと映画とが、どうして『それでね』ってつながるのかわからないけど。とにかくそんな調子で、村までおしゃべりが続いた。女ふたりでもじゅうぶんにかしましいのだけれど。なんだか千葉さん、必死で話題を探してた印象。

まさか、わたしが香純ちゃんのことを尋ねるのを封じ込もうとしてたんじゃ？

## 02. 性的イジメを目撃

留學生活の四日目。明日は土曜日。二日間、なにをして過ごそうかな。帰省たって——バスで最寄り駅まで五十分、ローカル線が三十分、新幹線で七十分、またローカル線で十五分、バス十五分。に、乗継の時間を加えると、片道四時間。乗換に手間取ったら四時間半。往復だけで合計丸一日がつぶれるし、父親が仕事で不在の確率も高いし、学区内に友達はいないし。本腰を入れて、畑仕事の基礎を学ぼうかな。なんて考えながら掃除当番してたら。

また、男子集団に囲まれた香純ちゃんが、運動場の端をぐるっとまわって、体育用具倉庫へ入ってった。

三日連続。絶対に、おかしい。なにかある。

「ごめん、おなかが痛くなったの」

モップを壁に立てかけて、教室から飛び出した。いちおうトイレへ向かって、そこから人目につきにくい出入口から出て、植え込みに身を隠すようにして体育用具倉庫へ一直線じゃなくてジグザグだけど、とにかくたどり



着いた。

こういうときの常道(どういう常道なのよ)として、そうっと裏手へまわって窓を探して、そこから中をのぞき込……えええええっ!?

叫びそうになって、両手で口を押えた。とんでもない光景が、ガラスの向こうに繰り広げられていた。

香純ちゃんに五人の男子が群がってる。詳しく描写すると(したくない!)……逆日焼けの全裸になった香純ちゃんが、上だけシャツを着てあお向けになってる男子の腰にまたがっていて。香純ちゃんの前に、やっぱり下半身を露出した男子が立っていて、腰を香純ちゃんの顔に押しつけてる。これ、フェラチオだよ。香純ちゃんはスクワットみたく腰を上下に動かしながら、そのリズムに合わせて上体も前後に揺すってる。香純ちゃんの口にペニスが入り出してる。

これって、これって……レイプ? 3P?

どっちでもないみたい。香純ちゃん、ちっとも嫌がってるように見えない。だから、レイプじゃない(と、思う)。

香純ちゃんは両手を横に伸ばして、そこに

立った男子のペニスを握って、手を動かして  
る——つまり、積極的にしごいてる。そして、  
香純ちゃんの背後から抱きついてる男子が、  
香純ちゃんの、乳房というにはあまりにささ  
やかな胸をなでるといってもむというか。香  
純ちゃんは痛いのかくすぐったいのか気持ち  
いい（まさかね）のか、上半身をくねらせて  
る。

もっとも的確にこの状況を言い表わすとし  
たら……合意のうえの6P！！??

「うああああ、ちもちいいよお」

香純ちゃんがペニスを吐き出して叫んだ。  
ガラス越しに聞こえてくる大声。舌ったらず  
もいいとこだけど、性的快感がはっきり伝わ  
ってくる。

あ。下になってた男子が身体を起こして、  
香純ちゃんを突き倒した。ペニスをしごかれ  
てた男子のひとりが、香純ちゃんの両脚を持  
って引き上げて折りたたんで——勃起してる  
ペニスを香純ちゃんの両脚の間（生々しい単  
語は使いたくない）に突き立てた。

しごかれてたもうひとりは、香純ちゃんの  
顔の上にT形になって腕立て伏せの姿勢。腕

は動かさずに、腰だけが上下してる。強制フェラチオ——イマラチオだっけ、イラマチオだっけ、とにかく、それ。

犯されてるって表現はできない。だって、香純ちゃんは不自由な姿勢なのに、自分から腰を上下に揺すってる。

「うおおおおっ……」

香純ちゃんを折りたたんでる男子が雄叫びをあげて、ブルブルッと腰を震わせた。動きが止まって。数秒で立ち上がった。腕立て伏せイラマチオの男子も、口の中に射精したんだろう。「先生、腕立て伏せ終わりました」みたいな感じで、スッと立ち上がった。

隙間から手を突っ込んでしつこく胸をさわっていた男子が、香純ちゃんを四つんばいにさせた。香純ちゃんが不意に顔を上げて——うわ、わたしに気づいたみたい。

え！？ なに？ どういうこと？？

香純ちゃん、だらしなく口を開けて、とろんとした眼差しで、でも、はっきりわたしを見つめてる。笑ってる？

香純ちゃんがどこかを見つめてるのに男子が気づい……やば！

わたし、尻餅をつくみたいに、ストンと腰を落として。そのまま四つんばいで逃げ出した。二メートルくらい進んでから振り返った。窓は閉じたまま。わたしは立ち上がって、猛ダッシュで（でも、植え込みの陰伝いに）教室まで逃げ帰った。

掃除は、とっくに終わってた。わたしが使ってたモップだけが、わざとらしく壁に立てかけたままになってるのを用具ロッカーに片して。

まだ、倉庫から誰も出てきていない（はず）。引き返して、もう一度様子を見る——一度胸なんて、わたしにはない。

香純ちゃんは、嫌がっているようには見えなかった。むしろ積極的にエッチ（なんて軽い表現じゃ追いつかないけど）なことをしてた。

のなら。他人のすることに、クチバシを挟むのはよくない。SEXをするのは、まだ早いとか。乱交なんて不健全だとか。それは個人の価値観の問題だと思う。

わたしだって……あんなのは、絶対に嫌だけど。好きな人ができて、求められたら、き

っと拒まないと思う。

香純ちゃんとわたしとは、一学年しか違わない。わたしが『するかもしれない』ことを香純ちゃんは『すでにしている』だけのことなんだ。

もしも、忠告してあげられることがあるとすれば……ああっ、思い出した！ 男子、みんなナマだった。これだけは、忠告してあげたほうがいいかな。

でも——と、押さえつけようとしてるわたしの（これをいうのは自分でも恥かしいんだけど）正義感が、どうしても頭をもたげてくる。

香純ちゃんのこれまでの様子を見ると。体育の見学とか、石山さんに叱られたときとか、そして、男子に囲まれてのスキップとか。年齢に見合った精神状態にはないような気がする。しかも、避妊もしてない。そりゃまあ、安全日だって知ってるのかもだけど。でも、ピルを飲んでてさえも九十何パーセントでしかないんだから。

駄目だ。どう自分を納得させようとしても——女の子の無知につけこんで性的に虐待し

てるとしか思えない。

でも、ほんとうに、そうなのだとしても。男子は、あんなに堂々と振る舞ってる。香純ちゃんが黙っているとしても、それでも、先生が気づいていないはずはない。たぶん、ほかの生徒も気づいてる。

そう思うと。更衣室での石山京香さんの香純ちゃんに対する態度が説明できる……ような気がする。「けがらわしい」ってつぶやき。あれだって、そうだ。

みんな、知ってて黙認してる？

だとすると。わたしが中途半端に告発しても、かえって煙たがられるだけかもしれない。

警察に訴えても。未来子ちゃんのと きみたい に、本人に恨まれたら立つ瀬がない。本人だけじゃない、ご両親にも恨まれた。あげくに、わたしがイジメの身代わりにされかけた。あんなことって、もう二度と体験したくない。それに、この山村留学をしくじってフリースクールに逃げ戻ったりしたら、AO入学もなくなってしまふ。地元で進学するにしても、もしかして内申書に無茶苦茶を書かれるんじゃないだろうか。先生たちの迷惑そうな対応

を見てたから、これ、被害妄想じゃないと思う。とすると、偏差値の低いとこしか行けなくて、七白学園で短大まで行く場合とは、人生がまるで変わってしまう。

たった四日前に会ったばかりで、七か月後にはわたしの人生から去って行く女の子。そんなのにまでかかざらってたら、それこそ、地球上から飢えた子がいなくなるまで、わたしも飢えていなくちゃならない。

いいよね。すこしくらい目をつむっても。

わたしだって、先生くらいのオトナから見たら、価値観もあやふやだし、善悪の判断も表面的にしかできないし、ネットの意見に左右されるし。でも、好きな人との交際を禁止されたりしたら、悲しむし怒る。わたしから見たら子供っぽい香純ちゃんでも、きっと同じだろう。

だから……だから。香純ちゃんがなにをしようとして、わたしには関係がないんだ。

……そんなことをずっと考えながら、週末はなににも手につかなかった。

でも、やっぱり。わたしには関係のないこ

とだと、はっきり確かめておきたいと思う。  
ので、月曜日。思い切って、石山京香さんを  
教室移動のとき、ちょこっと脇道へ引っ張っ  
た。

「あのね……本郷」

「やめて！」

もっのすごい権幕で怒られちゃった。移動  
中の三年生だけじゃなく、たまたま廊下を通  
りかかった人（先生を含む）まで振り返っ  
たほど。

石山さん、今度は逆にわたしの腕を引っ張  
って、物陰へ引きずり込んだ。

「いいわよ、教えてあげる。みんな知ってて、  
みんな黙ってるんだから。あなたも、そうし  
て。混ぜっ返しても、ややこしくなるだけな  
んだから」

早口にまくし立てて。一回二回と深呼吸。

「あの子はね、シチブなの」

それ、初日にも聞いた。

「元々はハチブだったの。あの子のお父さん、  
とんでもないことをしたんだから」

また、マシンガンみたいな早口で、事情を  
三倍速くらいで語ってくれた。



香純ちゃんの父親は、村の実力者の奥さんと駆け落ちしたんだそうだ。それも、村役場で出納係とかしてたから、逃走資金に公金を横領しちゃって。その実力者って人がスキャンダルを嫌って、村長さんとか説得して、警察には届けていない。そのかわり、奥さん（つまり香純ちゃんの母親）が、被害金額を弁償するって示談になった。詳しい金額は公表されてないけど、一千万円以上らしい。奥さんは出稼ぎに出て、そのあいだ、香純ちゃんは人質みたいなもの。

そういったいきさつで、香純ちゃんはハチブにされた。学校でのハチブじゃなくて、ほんとうの村八分。が、どんなものか、わたしには想像できないけど。

これだけでも、いつの時代の話かってほどだけど。そこからが、悲惨。

奥さんに逃げられた村の実力者が、香純ちゃんに奥さんの代役を引き受けさせた。代役だったって、お料理とかお掃除のことじゃない。つまり、夫婦生活の代役。たとえほんとうに合意があったとしても、逮捕されるんじゃないかな。

でも、村の実力者って人は、村全体の税金の半分以上をひとりで納めてて、お祭りとかのイベントにも、それがないと開催できないってくらいの寄付をしている。なので村全体が、その人のすることには目をつむってる。

その人の次男が、じきに父親のすることを真似るようになった。これって、親子丼とかいうんだっけ。しかも、その次男がここの生徒で、悪友にまで香純ちゃんを貸したりするようになって。

「だからハチブからそのイチブを引いて、シチブってわけ」

石山さんが話し終わった。百メートルを全力疾走したみたいな荒い息を吐いてる。

わたし、ただぼう然と……涙を流してる。

香純ちゃん、やっぱり、好きであんなことしてるんじゃないんだ。親の不祥事の尻ぬぐい。

「よそもんが同情したって、どうにもならないのよ。カスのことは、きれいさっぱり忘れてちょうだい」

言い捨てて、石山さんは立ち去った。

わたしは……十分かそこらは、その場に突

っ立っていた。授業に出れる気分じゃなかった  
たので、三年の教室に戻って、つぎの授業  
まで自分の席にへたり込んでた。そして次の  
授業も、教科がなんだったかすら覚えてい  
ない。頭の中をグルグルしてるのは香純  
ちゃんのことばかり。

そして、とんでもない可能性に気づいた。

お昼休みに三年男子は全員が教室から出  
て行って、入れ替わりに香純ちゃんを除く  
二年女子がやってくる。ということは……ま  
さか、教室の中で変なことをしてるなん  
て思いたくはないけど。

わたしはお弁当をカバンにしまったまま、  
購買部へ行った。あれこれ迷わず、パンを  
二つと牛乳を買って、ぐるっと回り道をし  
た。

校舎には出入口が三つある。真ん中は来  
賓用とかで、生徒の使用は禁止。校門に  
近い端に下足箱が並んでいる。購買部は、  
いちばん奥の出入口近く。なので、そこ  
から上履きのまま外へ出て、手前の出入  
口から校舎へ入った。

一年生は、きちんとそれぞれの席（だ  
と思う）で、購買部組が二人とあとはお  
弁当。女

子だけでなく男子もけっこうおしゃべりして、たった十一人でも、わたしがいた学校のクラス三十五人よりかまびすしい。

そして、空の教室を二つおいて、二年生の教室。の手前で立ちすくんだ。

席に就いてお弁当を食べているのは四人だけ。あとの六人は、教室の後ろで香純ちゃんを取り囲んでる。お弁当箱を持ってるのが二人と、あとはパンを食べながら。

「ほら、オアズケ」

香純ちゃんの目の前で、食べかけのパンをぶらぶら振っている。

香純ちゃんは、下着に見える逆日焼けの肌をさらしてる。つまり全裸で、両脚を開いて正座して、両手を前についてる。締まりのない顔で、じっとパンを見上げてる。

「チンチン」

香純ちゃんが身体を起こして両手を胸の前に垂らして、犬のチンチンの真似。

「ハッハッハッ」

舌を出して、まるっきりの犬。

「マンマン」

香純ちゃん、羞恥心とかなないんだろうか。

チンチンのポーズのまんま、腰を浮かして脚を直角くらいに開いた。

まだ毛が生えてない。まさか初潮前かなと疑う。それなら、避妊の心配はしなくて……じゃなくて！ そんな子を何人もで性的に虐待するなんて、絶対に許せない。

「クパア」

やだ。両手を股間にもってって、そこを左右に開いた。濃いピンク色の奥までのぞき込めてしまう。

もう、見てられない。わたしは、それでも足音を忍ばせて、急いで引き返して、校舎の外を回って、奥の出入口から三年生の教室へ戻った。

戻って、自分の席に座って。ようやく、心臓がバクバクしてるのに気づいた。顔がすごく火照ってる。てか、血が逆流してる。

香純ちゃん、毎日毎日、昼休みはエッチな遊びをさせられて、放課後はSEXさせられてるんだろうか。

そう、『させられてる』んだと思う。

でも、それだけじゃない。石山さんの話だと、夜は村の実力者って人に夫婦生活の代役

をさせられてるんだ。SEX地獄。そんな言葉が頭をよぎった。

結局。買ったパンも持ってきたお弁当も食べないまま、午後の授業を（頭が空回りしてるまま）受けることになった。だって、あんなの目撃した直後だよ。食欲なんて、吹っ飛んでしまった。

このまま、見て見ぬふりをしてて、いいんだろうか。先生に訴える――のは、無駄だろう。石山さんや千葉さんの態度を見れば、それはすぐにわかる。未来子ちゃんがイジメられてたときの、クラスのみんなの様子とまったく同じだ。

ううん、もっとひどい。未来子ちゃんは、レイプまではされなかった。服を脱がされて男子に裸を撮影されて、拡散するって脅されて、パシリとか寄付金とか。殴られたりもしたけど、せいぜい、それくらいだった。

香純ちゃんのは、次元が違う。だから、わたしが香純ちゃんを助けようとしたら……村の実力者なんて本物の悪人が元凶なんだから。そいつが村を支えてるそうだから。わたし、絶対に追い出される。七白学園に進学できな

くなる。わたしの人生を棒に振ってまで、他人を助けなくちゃいけないなんて、そんなこと……ないよね？

なんて思っても。

また、香純ちゃんが体育用具倉庫へ連れ込まれてるのを目撃してしまうと、見捨ててはおけない。

かかわっちゃいけない、わたしにはわたしの人生があるんだから。心の中で繰り返しながら。でも、どんなひどいことされるのか、気になって。

ええい、正直に告白する。『興味』があったのは事実。わたしだって、女性ホルモンに支配されてる思春期の女の子だもの。エッチなことには興味津々。

だから、またのぞき見をしたの！

先週より、もっとひどいことをされてる。

縄跳びで後ろ手に縛られて目隠しされて、膝立ち。それを三年男子が五人と二年男子が一人とで取り囲んでる。みんな、ズボンとパンツを膝までずり下ろして。みんな、ペニスを勃起させてる。そして、なぜか右手にベルトを持ってる。

香純ちゃんは、そのうちの一人にフェラチオしてて。

今日は、誰かが閉め忘れたんだろう。窓がすこし開いてて、声が筒抜け。

「わかった、がくとさまだあ」

香純ちゃんがペニスから顔をはなして、得意げに言った。

「おお、正解。さすが、毎晩くわえてるだけあるな」

「ちゃうよ。まいばんは、ごしゅじんさまだよ。それでね、どようびとにちようびは、みねとさまだよ」

「おれだって、せいぜい一日おきだよ」

「馬鹿に言い返しても、しょうがねえだろ。ほい、つぎだ、つぎ」

蒲田くんの隣の男子が、香純ちゃんの頭を引き寄せて、口にペニスを突きつける。香純ちゃんは、嫌がるそぶりも見せずに（うれしそうに、とはさすがに形容したくない）くわえた。AVみたいな熱心でエッチなフェラチオじゃなくて、もごもごと味わってるみたいな感じ。

「うーんとねえ。おおがきうちくん？」



「はーずーれー♪」

香純ちゃんのお尻の真後ろにいた男子がベルトを振り上げて。

パシイン！

香純ちゃんのお尻をぶった。

「きゃああ！ いたい。カスちゃんをいじめないでよお」

「虐めちゃいけない。罰ゲームだろ」

「はいはい、つぎ」

香純ちゃんに向きを変えさせて、隣の男子がペニスを口に突っ込む。

香純ちゃんも、同じことを繰り返して。

「がくとさまかなあ？」

ぎやははははと、男子全員が笑った。

「そりゃ、さっき言ったろ」

「これはスペシャル罰ゲームだな」

香純ちゃんは立たされて。六人の男子はズボンをはき直して、でもベルトは手に持ったまま、一步後ろに下がった。

まさか、全員で香純ちゃんをたたくつもり？

だった。

「せえの」

ひとり置きに三人がベルトを振った。

パシイン！

パシイン！

パシイン！

コンマ何秒かの時間差で、背中をクロスにたたいて、最後の一人はおなかを水平に。

「きゃああっ！」

香純ちゃん、身体を『く』の字に折って、床にうずくまった。

わたし、脳天に血が逆流した。これって、もうイジメなんてものじゃない。純然たる虐待だ。

「まだ半分残ってる。さっさと立てよ」

男子が二人がかりで、両脇に手を差し入れて立ち上がらせた。縄跳びをほどいて、手首を握って腕を水平に引っ張る。足を絡ませて、五十センチほども開脚させた。まるで大の字張り付け。

「ねえ、いじめないでよお。いたいの、やだよお」

香純ちゃんは泣き声になってる。でも、男子は容赦ない。

パパパッシイイン！

今度は、ほとんど同時に。胸とお尻と股間をたたいた。それも、股間は下からすくいあげるようにして！

「きゃああああっ！」

香純ちゃんの悲鳴は、さっきよりずっと大きくて凄惨だった。

男子が手をはなすと、かおりちゃんは胸と股間を両手でおさえて、その場に膝を突いて。ふらあっと、前へ倒れた。

ドサッと身体が床にぶつかる音。

男子はニヤニヤ笑いながら眺めている。

「うあああ、いたいよ。うええええん……」

香純ちゃんが泣きじゃくる。

「なあ。ちょっと、やり過ぎじゃないか？」

「おれ、Sってわけじゃねえし」

薄笑いを消して真顔に還った男子もいる。

「おれ、今日ははやめとくわ」

半数の三人が、倉庫から出て行った。

「だまされてやんの」

吐き出すように言ったのは、がくと——蒲田岳人くんだった。違う、蒲田岳人だ。こんなやつら、『くん』付けする必要はない。呼び捨てでも、もったいない。

「おれんちでの遊びは、こんなオママゴトじゃないんだよ。週末なんか、月曜まで傷が残るくらいに可愛がってるんだから」

蒲田が、とんでもないことをサラッと言った。

「おまえの親父さんはドSだかんな。おれらは、生オナホでじゅうぶんだ」

「ということで、さっさとやっちまおう」

「それじゃ、三人まとめよう」

蒲田が、まだ泣きじゃくってる香純ちゃんの手を引き剥がして、ちっちゃな乳首をつねった。

「いたいいたいいたいよお」

「つねられたくなけりゃ、さっさと動け。聞いてたろ。三穴同時だ」

「うん……わかった。ちゃんとするから、いじめないでね」

清水がズボンを脱いであお向けに寝て、その上に香純ちゃんが対面騎乗位でまたがった。

蒲田がイラマラチオをさせて。

前かがみになった香純ちゃんの後ろから、大垣内が清水をまたいでおおいかぶさった。

うわ！ アナルに挿入した。

こんなの……そりゃ、エロサイトで見たことくらいは、あるけど。まさか、リアル●学生が、わたしの目の前でしてるなんて。

香純ちゃんは小柄だから、凶暴な男三人のなかに埋もれて、大嵐の中の難破船（そっちは、見たことない）みたいに翻弄されてる。

こういうのって、女性のほうはどうだか知らないけど、男は興奮するんだろうな。あっという間に三人とも射精しちゃった。

男は射精したら、たちまち醒めるっていうけど。でも、Sっ気は別らしい。

丸いボール籠から、わざわざバスケットボールを取り出して、代わりに香純ちゃんを折り曲げてお尻から突っ込んだ。

そして、倉庫から出て行った。

香純ちゃんは、もう泣きやんでいて。ぼう然というか、ぼけ一っとしてる。

肩まですっぽりとはまり込んでるから、自力では脱出できそうにない。そのうち、あいつらが戻って来るんだろうけど、忘れてしまうか、それとも故意に明日まで放置とか……まさか。

とは思うけど。でも、助けてあげなくちゃ。

これくらい、交通事故を目撃して通報するのと同じだよ。かかわり合いになるってほどじゃないよね。

出入口へ回ろうとして。ショーツがぬめっているのに気づいた。

やだ……でも、虐待だとしても、性的にも凄まじいシーンを見せつけられたんだから、興奮しても仕方ない。わたしにMっ気があるとか、そういうことじゃないと思う。

出入口の手前であたりを見回して。陸上部は全員が（やる気を感じられない）スローペースのランニング中で、こっちに背中を向けている。ほかに、人影はない。

すきさっと用具倉庫へは行って、急いで戸を閉める。覚悟を決めて向き直って、香純ちゃんに対面。

「あ、てんこうせいのおねえちゃんだあ」

まるきり状況にそぐわない、のんきな声。は、このさい無視。

「助けてあげる」

後ろから脇の下に両手を差し入れて抱きかかえて。

「きゃはは、くすうったい」

駄目だ。腰を曲げた不自然な体勢なので、力がはいらない。

そうだ。もっかい前へ戻って、ボール籠を手前に傾けた。いきなり倒れないように、ゆっくりと倒していく。

「ころんじゃうよ。こあいよ」

そうならないようにがんばってるんだってば。四十五度くらい傾けて、あとはむしろ引っ張り起こすくらいの感じで、どうにか成功。しゃがんで、前に突き出している香純ちゃんの手を引っ張る。

「自分でも出ようとしちょうだい」

「うん。こう？」

香純ちゃんが膝を曲げて足を踏ん張って。ずるずると、身体がボール籠から抜けた。

香純ちゃんは裸のまま、ぼけっと突っ立ってる。わたしのほうに顔を向けてるんだけど、視線はわたしを突き抜けてる印象。

「香純ちゃん」

とにかく、きっちり確認しとかないと。

「さっきみたいに、いつも虐められてるの？」

「カスちゃん、いじめられてなんかないよ」

「え……？」

「じよしはあそんでくれないけど、だんしはカスちゃんとあそんでくれるの。ちもちいし、たのしいよ」

やっぱりだ。多分そうだとは思ってたけど。精神に障害のある無知な子を、男子全員でオモチャにしてるんだ。

「あのね。こういう遊びは、よくないのよ。先生に叱られるよ」

「ちゃうよ。せんせいだって、カスちゃんとあそんでくれるもん」

血流再沸騰。なんてこと！？ 教師までが性的虐待に積極的にかかわってるの！？

「あのね……」

言葉が続かない。と同時に、保身っていう嫌な単語が頭に浮かんだ。

こんな凄まじい性的虐待。やっぱり、証拠をそろえて警察に訴えるしかない。大騒ぎになる。それに。香純ちゃんは村の実力者の性奴隷にされてるっていうから、そいつからも仕返しがあるだろう。

もっともうまく事が運んでも、わたしは村を出て行くことになる。こんな村や学校からは一日でも早く逃げ出したいけど。でも、A



○進学が消えてしまう。

ああ、もう！

ここでグチャグチャ考えてても、どうにもならない。ので、棚上げ。

「香純ちゃん、服を着ようよ」

「きてもいいの？」

「着なさい！」

「うああ、おこないでよお。カスちゃん、いうこときくから」

脱ぎ散らかしてる制服を拾い上げて、素肌にセーラー服を着る香純ちゃん。

そのときになって、やっと気づいた。

「ストップ。お股が汚れてる。きれいにしようね」

自然と、幼児に話しかける口調になってるわたし。

「へーきだよ。おうちにかえってから、しゃわーするもん」

平然とスカートをはいた。

あ、そうか。下着は着けてないんだ。こういうときは便利——じゃない！

「香純ちゃん、もう帰るんでしょ」

「うん、かえる」

「それじゃ、一緒に帰ろうね」

ボール籠から抜け出して勝手に帰っているところを男子に見つかったら、またなにをされるかわからない。わたしがついてあげなくちゃ。

でも、そうすると、わたしが助けたと明白になっちゃう。

そのときは、そのとき。最悪、もう関与しないって約束してしまえば、こっちにまでトバッチリはこない……だろう。

だけど。そんなふうに香純ちゃんを見捨てられるだろうか。助けてから突き放すのは、最初から助けないよりも悪いと思う。

ええい。そんな先の先まで考えられないよ。とにかく、今日は。香純ちゃんを家まで送ってく。明日は——明日、考える。

部活の生徒はまだ学校だし、帰宅部はとっくに帰ってるという中途半端な時間。おかげで、通学路には人影もない。

山道を下りながら、わたしの頭の中では警報が鳴りっぱなし。

やめておけ、手を引け。こんな子のために

自分の人生を台なしにしていいのか。引き返せ。今なら、まだ間に合う。

だもんで。平地に下りてしばらく歩いて村が見えてきたところで。

「悪いけど、先に帰ってくれる？ 足が痛いので、すこし休んでいく」

香純ちゃん、チロツとわたしを見上げた(香純ちゃんのほうが、五センチくらい背が低い)。突き刺すような視線——と感じたのは、わたしの内心のやましさの反映だろう。

「うん、わかった」

香純ちゃんはスキップしながら遠ざかっていった。その後ろ姿は——毎日のように性的虐待を受けている可哀想な女の子には、とても見えなかった。